関東大震災の日、浜離宮の警手は門を開き、浅草の鳶頭は水を運ばせた

大正十二年（1923年）九月一日、大地震が起こり、続く火事が三日にわたって東京の大半を焼きました。

その日、浜離宮では、皇宮警手の皆川千次郎が、上官の命令を待たずに門を開き、およそ五万の人を庭に入れました。浅草では、逃げてきた人の中に、鳶頭（土木や建築の仕事をする鳶職の親方）の馬場斧吉がいました。斧吉は群衆を池まで並ばせて水を手渡しさせ、観音堂を火から守りました。

一方は門を開いて人を入れ、もう一方は人を並ばせて堂を守ったのです。

On the first day of the ninth month of the twelfth year of Taishō, 1923, a great earthquake struck, and the fires that followed burned most of Tokyo over three days.

That day at Hama Rikyū, Minagawa Senjirō, a palace guard, opened the gates without waiting for orders from his superiors, and let some fifty thousand people into the garden. In Asakusa, Baba Onokichi, a fire-brigade foreman who was among those who had fled there, lined the crowd up to the pond to pass water from hand to hand, and saved the Kannon Hall from the fire.

One opened the gates to let people in; the other lined people up to save a hall.

海軍省の用地などに逃げていた群衆に、猛火が迫っていました。電話は利かず、本省に命令を求める暇もなかった、と『大正震災美績』に記録されています。同じ記録には、離宮を開いた例はそれまで無かった、ともあります。皆川は、命令を待たずに開けば越権（権限を越えること）を問われるかもしれないが、道理には反しない、と説きました。九月一日の午後四時半、通用門が開かれ、群衆は外庭に入ります。やがて内庭まで開かれ、逃げてきた人は「無慮五萬」（およそ五万）にのぼりました。

同じ日、浅草の観音堂も、四方を猛火に囲まれていました。そのとき、避難した人の中にいた鳶頭の馬場斧吉が、組子（配下の者）八人を指揮しました。群衆を池のほとりまで二列に並ばせ、水を汲んでは手渡しさせて、燃え始めた二天門などを防いだのです。こうして観音堂は、焼けずに残りました。

皆川は、のちにこう語っています。「妻にだけは打ちあけて免職後の善後策を講じさせておいた」（妻にだけ打ち明け、職を失ったあとの備えをさせていた）。そして一月半ののち、十月十八日に、皇宮警察部長から賞状を受けたと語りました。

Fierce fires were closing in on crowds who had fled to the grounds of the Navy Ministry and nearby. The Taishō Shinsai Biseki records that the telephones did not work, and there was no time to ask the ministry for orders. The same record adds that no detached palace had ever been opened before. Minagawa argued that if they opened it without waiting for orders they might later be charged with overstepping their authority, but that it would not go against what was right. At half past four in the afternoon of the first day of the ninth month, the side gate was opened, and the crowd entered the outer garden. In time even the inner garden was opened, and those who had fled there numbered "muryo goman" (some fifty thousand).

That same day, the Kannon Hall in Asakusa was also ringed by fierce fire on all sides. Then Baba Onokichi, a fire-brigade foreman who was among those who had taken refuge, led eight of his men. He lined the crowd up in two columns to the edge of the park's pond, had them draw water and pass it from hand to hand, and held back the fire at the Niten Gate and other places that had begun to burn. And so the Kannon Hall was left unburned.

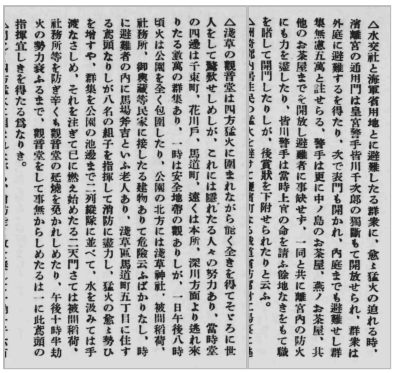
Minagawa later said this: "I had told only my wife, and had her make arrangements for after I was dismissed." And he said that after an uneasy month and a half, on the eighteenth day of the tenth month, he received a letter of commendation from the head of the Imperial Palace Police.

れきしねた ガイドネタ帳 | Rekishi-Neta Guide Notes | © 2026 Rekishi-Neta

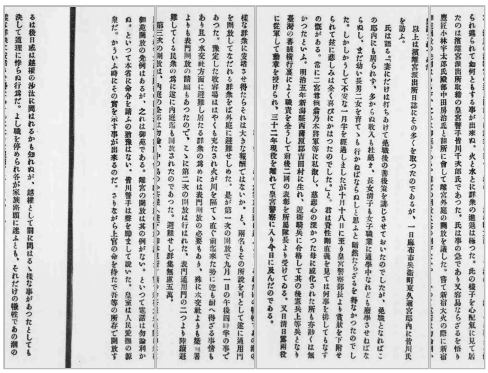
S6 海外から来たお客様 浜離宮恩賜庭園・他

お客様用

記録の言葉



東京市編『東京震災録 別輯』（東京市、昭和2年）



東京府編『大正震災美績』（東京府、大正13年）

浅草の觀音堂は四方猛火に圍まれながら能く全きを得てそゞろに世人をして驚歎せしめしが、これには隱れたる人々の努力あり、 p.905

時に避難者の內に馬場斧吉といふ老人あり、淺草區馬道町五丁目に住する鳶頭なりしが八名の組子を指揮して消防に盡力し、…群集を公園の池邊まで二列縱隊に並べて、水を汲みては手渡なさしめ、それを注ぎて已に燃え始めたる二天門さては被間稻荷、社務所等を防ぎ…觀音堂の延燒を免かれしめたり、午後十時半劫火の勢力衰ふるまで、觀音堂をして事無からしめたるは一に此鳶頭の指揮宜しきを得たる爲なりき。 p.905

水交社と海軍省用地とに避難したる群衆に、…猛火の迫れる時、濱離宮の通用門は皇宮警手皆川千次郎の獨斷もて開放せられ、群衆は外庭に避難するを得たり、次で表門も開かれ、內庭までも避難せし群集無慮五萬と註せらる、警手は更に中ノ島のお茶屋、燕ノお茶屋、其他のお茶屋までを開放し避難者に事缺せず、一同と共に離宮內の防火にも力を盡したり、皆川警手は當時上官の命を請ふ餘地なきをもて職を賭して開門したりしが、後賞狀を下附せられたりと云ふ。 p.906

といつて電話は勿論利かぬ。といつて本省に命令を請ふの猶豫はない。 p.32

皆川警手は聲を勵まして說いた。／さりながら上官の命を待たで吾等の所存で開放するは後日或は越權の沙汰に問はれるかも知れぬが、越權として罰に問はるゝ樣な事があつたとしても決して道理に悖らぬ行爲だ。 pp.32-33

遂に通用門を開放してなだれる群衆をば外庭に避難せしめた。是が第一次の開放で九月一日の午後四時半の事であつた。 p.33

表門通用門の二つより陸續避難してくる民衆の爲に遂に內庭迄も開放されたのであつた。避難せし群集無慮五萬。 p.33

氏は語る。「妻にだけは打ちあけて免職後の善後策を講じさせておいたのでしたが、 p.34

しかしかうして不安な一月半を經過しましたが十月十八日に至り皇宮警察部長より賞狀を下附せられて茲に悲しみは全く喜びにかはつたのでした。」 p.34

嘗て新宿大火の際に新宿／御苑開放の先例はあるが、之れは御苑である。離宮の開放は其の例がない。 p.32

れきしねた ガイドネタ帳 | Rekishi-Neta Guide Notes | © 2026 Rekishi-Neta

S6 海外から来たお客様 浜離宮恩賜庭園・他

ガイド用 ／ お客様にはお見せしません

関東大震災の日、浜離宮の警手は門を開き、浅草の鳶頭は水を運ばせた

⚠ 機微（#152）：関東大震災で多くの人が亡くなった日の話です。助かった人の話として語り、亡くなった人のことを軽く見る言い方にしないでください。

⚠ 機微（#151）：関東大震災で多くの人が亡くなった話です。焼け残った堂の話を、亡くなった人のことを軽く見る言い方にしないでください。

読み上げる文（お客様用の紙と同じもの）

大正十二年（1923年）九月一日、大地震が起こり、続く火事が三日にわたって東京の大半を焼きました。

その日、浜離宮では、皇宮警手の皆川千次郎が、上官の命令を待たずに門を開き、およそ五万の人を庭に入れました。浅草では、逃げてきた人の中に、鳶頭（土木や建築の仕事をする鳶職の親方）の馬場斧吉がいました。斧吉は群衆を池まで並ばせて水を手渡しさせ、観音堂を火から守りました。

一方は門を開いて人を入れ、もう一方は人を並ばせて堂を守ったのです。

On the first day of the ninth month of the twelfth year of Taishō, 1923, a great earthquake struck, and the fires that followed burned most of Tokyo over three days.

That day at Hama Rikyū, Minagawa Senjirō, a palace guard, opened the gates without waiting for orders from his superiors, and let some fifty thousand people into the garden. In Asakusa, Baba Onokichi, a fire-brigade foreman who was among those who had fled there, lined the crowd up to the pond to pass water from hand to hand, and saved the Kannon Hall from the fire.

One opened the gates to let people in; the other lined people up to save a hall.

海軍省の用地などに逃げていた群衆に、猛火が迫っていました。電話は利かず、本省に命令を求める暇もなかった、と『大正震災美績』に記録されています。同じ記録には、離宮を開いた例はそれまで無かった、ともあります。皆川は、命令を待たずに開けば越権（権限を越えること）を問われるかもしれないが、道理には反しない、と説きました。九月一日の午後四時半、通用門が開かれ、群衆は外庭に入ります。やがて内庭まで開かれ、逃げてきた人は「無慮五萬」（およそ五万）にのぼりました。

同じ日、浅草の観音堂も、四方を猛火に囲まれていました。そのとき、避難した人の中にいた鳶頭の馬場斧吉が、組子（配下の者）八人を指揮しました。群衆を池のほとりまで二列に並ばせ、水を汲んでは手渡しさせて、燃え始めた二天門などを防いだのです。こうして観音堂は、焼けずに残りました。

皆川は、のちにこう語っています。「妻にだけは打ちあけて免職後の善後策を講じさせておいた」（妻にだけ打ち明け、職を失ったあとの備えをさせていた）。そして一月半ののち、十月十八日に、皇宮警察部長から賞状を受けたと語りました。

Fierce fires were closing in on crowds who had fled to the grounds of the Navy Ministry and nearby. The Taishō Shinsai Biseki records that the telephones did not work, and there was no time to ask the ministry for orders. The same record adds that no detached palace had ever been opened before. Minagawa argued that if they opened it without waiting for orders they might later be charged with overstepping their authority, but that it would not go against what was right. At half past four in the afternoon of the first day of the ninth month, the side gate was opened, and the crowd entered the outer garden. In time even the inner garden was opened, and those who had fled there numbered "muryo goman" (some fifty thousand).

That same day, the Kannon Hall in Asakusa was also ringed by fierce fire on all sides. Then Baba Onokichi, a fire-brigade foreman who was among those who had taken refuge, led eight of his men. He lined the crowd up in two columns to the edge of the park's pond, had them draw water and pass it from hand to hand, and held back the fire at the Niten Gate and other places that had begun to burn. And so the Kannon Hall was left unburned.

Minagawa later said this: "I had told only my wife, and had her make arrangements for after I was dismissed." And he said that after an uneasy month and a half, on the eighteenth day of the tenth month, he received a letter of commendation from the head of the Imperial Palace Police.

お客様にとっての発見

大正十二年（1923年）九月一日の大地震の日、浜離宮では皇宮警手が命令を待たずに門を開き、浅草では鳶頭が群衆に水を運ばせて観音堂を守ったと記録されています。お客様は、いま立っている庭や寺が、その日に人を守った場所だ

れきしねた ガイドネタ帳 | Rekishi-Neta Guide Notes | © 2026 Rekishi-Neta

ったことを、本人の言葉とともに見つけます。

語り方のコツ

- **「なぜ観音堂は焼けなかったのか」と尋ねられたら**
  > 「鳶頭の馬場斧吉の指揮がよかったためだ、と『東京震災録 別輯』に記録されています」とお答えください。

どこまで断定してよいか

断定してよい

浜離宮の門について

- 浜離宮の通用門は、皇宮警手の皆川千次郎の独断で開かれ、群衆は外庭に避難した（東京市編『東京震災録 別輯』）
- 電話は利かず、本省に命令を請う猶予も無かった（東京府編『大正震災美績』）
- 皆川は、罰に問われることがあっても道理に悖らない行為だと説いた（同）
- 第一次の開放は九月一日の午後四時半で、通用門から外庭へ群衆を入れた（同）
- ついに内庭まで開かれ、避難した群集は無慮五万だった（同）
- 新宿の大火のときに新宿御苑を開いた先例はあったが、離宮を開いた例は無かった（同）

皆川が語ったことについて

- 皆川は、妻にだけは打ち明けて免職後の善後策を講じさせたと語った（東京府編『大正震災美績』）
- 十月十八日、皆川は皇宮警察部長から賞状を受けたと語った（同）

地震と浅草の観音堂について

- 大正十二年九月一日に大地震が起こり、猛火が三日にわたって帝都の大半を焼いた（東京市編『東京震災録 前輯』）
- 浅草の観音堂は四方を猛火に囲まれながら、無事に残った（東京市編『東京震災録 別輯』）
- 鳶頭の馬場斧吉が組子八名を指揮し、群集に池の水を手渡しさせて観音堂の延焼を免れさせた（同）

★言わない

- 観音堂が焼け残ったのを、仏の力だと言わないでください
- 二人とも命令を待たずに動いた、とまとめないでください

この物語のもとになった小ネタ

- #152　関東大震災の日、浜離宮の皇宮警手は独断で門を開き、群集を庭に入れた
- #151　関東大震災の日、浅草の観音堂は、鳶頭が群集に水を運ばせて焼け残った

番号は小ネタの紙の番号です。詳しくは、それぞれの小ネタの紙で。

記録の言葉

ほか引用 8 件は紙に載せていません（2ページに収めるため）

原本の画像を 11 枚載せていません（2ページに収めるため）

お客様用の紙には、原本の画像を 1 枚載せていません（2ページに収めるため）

東京市編『東京震災録 別輯』（東京市、昭和2年） 一次

> 水交社と海軍省用地とに避難したる群衆に、…猛火の迫れる時、濱離宮の通用門は皇宮警手皆川千次郎の獨斷もて開放せられ、群衆は外庭に避難するを得たり、次で表門も開かれ、內庭までも避難せし群集無慮五萬と註せらる、警手は更に中ノ島のお茶屋、燕ノお茶屋、其他のお茶屋までを開放し避難者に事缺せず、一同と共に離宮內の防火にも力を盡したり、皆川警手は當時上官の命を請ふ餘地なきをもて職を賭して開門したりしが、後賞狀を下附せられたりと云ふ。 p.906

東京府編『大正震災美績』（東京府、大正13年） 一次

> 表門通用門の二つより陸續避難してくる民衆の爲に遂に內庭迄も開放されたのであつた。避難せし群集無慮五萬。 p.33
> 氏は語る。「妻にだけは打ちあけて免職後の善後策を講じさせておいたのでしたが、 p.34

れきしねた ガイドネタ帳 | Rekishi-Neta Guide Notes | © 2026 Rekishi-Neta